様式　Ｃ－７２－１

令和６(2024)年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）
実績報告書（プログラム実施報告書）
（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表（B)」
（ひらめき☆ときめきサイエンス～ようそこ大学の研究室へ～KAKENHI)」

課題番号：　　２４ＨＴ０１３４
プログラム名：　「記憶」の働きからみたダイバーシティ -心理学の実験から探ってみよう

所属研究機関	名称	京都市立芸術大学
	機関の長職・氏名	理事長・赤松　玉女
実施代表者	部局	美術学部／美術研究科
	職	准教授
	氏名	堀田千絵

開催日	受講対象者	交付申請書に記載した募集人数	当日の参加者数
令和　6 年 11 月 23 日 ～　11 月 23 日	□小学校 5 年生　□小学校 6 年生 ■中学校 1 年生　■中学校 2 年生　■中学校 3 年生 ■高校 1 年生　■高校 2 年生　■高校 3 年生	30 人	22 人
実施場所	京都市立芸術大学		

プログラムの目的

実施代表者が科研費による成果にて公表してきた、子ども、高齢者や障害のある人を対象にした先行研究を紹介することにより、記憶の働きの多様性（ダイバーシティ）について、受講生が驚きと興味でもって理解を深めるとともに、「記憶」という見えない現象が実験的に可視化できる魅力に気づくことを目的とする。その際、自身と様々な他者の記憶の働きの共通点や相違点を可視化できることにより、ダイバーシティの視座から受講生自身の日々の生活や学習の場面に散在する記憶の働きについて関心をもつことができるとともに、心を科学的に研究する面白さを実感できることに加え、受講生が自らを対象に実験してみることにより、「記憶」の多様性という観点からダイバーシティへの理解を体験的に深め、他者とその経験に基づく考えを共有しながら、各自考察させることを目的とする。

プログラムの実施の概要

【受講生に分かりやすく科研費の研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点】

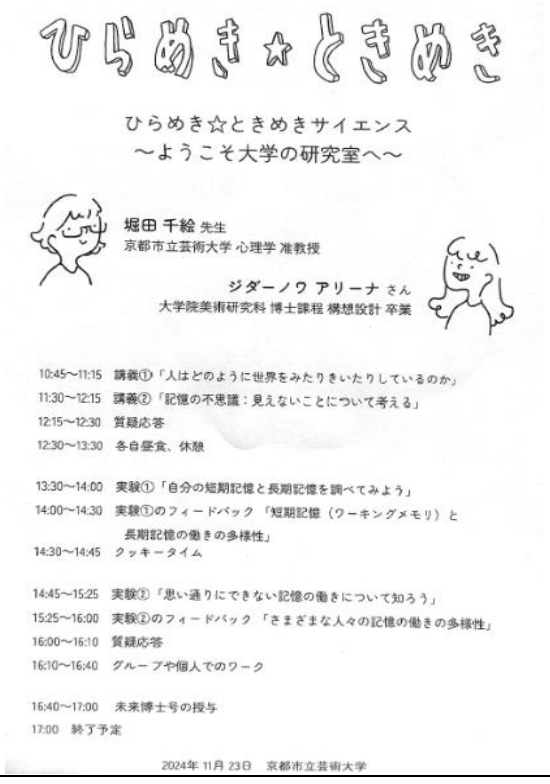
対象は中学生、高校生であり、中学１年生が受講生であることを視野に入れた「記憶」実験を取り入れるため、以下２点に留意した。

① 申請書にも記載のとおり、科研における事前アンケートにおいても受講生から本テーマに関して、心理学実験の装置やその仕組みを知りたいという要望もあり、大学の研究で使っている心理学実験の装置に興味をもつことができるよう、最先端の研究を実感できる場とした。

② 講義、実習全体を通して興味をひくように、受講生が自らを対象に、実験するフィールドワークを盛り込み、直接体験できるプログラムを用意した。具体的には、科研費による成果報告で公表している文字、単語及び絵画を学習材料とし、ノートパソコンにおける実験ソフトを活用し、受講者自身が自分を実験参加者とし、身近に感じる短期記憶（ワーキングメモリ）及び長期記憶と、思い通りに思い出すことのできない心の働きについて、記憶をテーマとして実験をつうじて体験できるようにする（堀田, 2011；平成 22 年度 研究公開促進費「学術図書」）。

【当日のスケジュール】

冒頭で、当日のスケジュール（右チラシ）を案内した。プログラムの最初には、主題である「記憶」につながる講義①「人はどのように世界をみたりきいたりしているのか（講師：堀田千絵)」を行い、導入として、大学の講義の雰囲気を体験できるようにした。実際に、その場で受講者がどのような体験をしたのかフィードバックの後、本プログラムの主題である講義②「記憶の不思議：見えないことについて考える（講師：堀田千絵)」を行った。質疑応答後に、午後に行う実験の説明を事前に行った。午後は、実験①「自分の短期記憶と長期記憶を調べてみよう（講師：堀田千絵)」を行い、受講生が自ら短期記憶と長期記憶の実験に参加し、ペアあるいはグループにて。その後、実験①のフィードバックとして、様々な人々の短期記憶



（ワーキングメモリ）並びに長期記憶の働きについて紹介し、記憶の働きが多様であることを実感する機会とする。クッキータイム後に、実験②「思い通りにできない記憶の働きを調べてみよう（講師：堀田千絵）」を行い、受講生が自ら「覚えた通りに思い出すことができない」、「思い通りに忘れることができない」ことを実験的に経験できるようにした。最後に、修了証書及びトロフィーを授与した。

【安全配慮】

本プログラムは、心理学実験を基にしたプログラムであるため、生命の危険に類する安全配慮は該当しないが、個人情報等への取扱に関して以下のことを留意した。受講生各自の名前が公表されることのないよう、受講者に番号を割り振った。実験を行った後、結果それ自体を公表するのではなく、結果から考えたことをワークシートに考察しながら、ペアやグループで共有するよう、促した。その後、小人数にグループ分けし必要に応じて、実施協力者（大学生、大学院生、元大学院生）が入り丁寧に指導した。

【事務局との協力体制】

広報活動については、本学事務局広報センター及び施設担当者との協力により事前に案内した。募集案内の原稿を作成し、機関のホームページや広報誌に掲載した（https://www.kcua.ac.jp/kakenhi-kioku2024/）。

【課題】

課題２点ある。第１に、受講者の把握がやや遅れたこともあり、受講者にとって本プログラムに参加しやすい物理的環境を用意できていたかということ、当初予定していたクッキータイムでの消耗品、チラシ、広告等への発注を間に合わせる印刷の準備に時間を要することとなり、開催時期に合わせた事務局科研担当者との打ち合わせと準備期間に余裕をもつ必要があるといえる。第２に、受講生の質問の時間を十分に確保できなかった点である。受講者の以下の感想からも、他の受講者からの質問を個別に受け付ける時間をさらに設定することが必要であったといえる。

「元々、心理学に興味があり参加しました。話をずっと聞く感じなのかなと思っていましたが、色々体験しながら、楽しくすることができました。講義が終わったあと、質問しに行くと色々な話をしてくださって、嬉しかったです。将来の夢の選択肢が増えた気がします。本当にありがとうございました。」

【発展性】

本学大学院生と協同において、記憶の働きの実践的実験として、想起と忘却の重要性にかかわるアートベースリサーチの可能性及び今後の研究の展開と可能性についてもレクチャーした。以上を通し、様々な人々の記憶の働きを踏まえ、自らの記憶の働きをダイバーシティの観点で捉える機会とした。なお、実験①②ともに、研究協力者や実施協力者が補助に入り、（１）本プログラムで感じたことや考えが深まったこと、（２）（１）を通じてこれまでの経験から思い出されること等を共有しながらディスカッションを行ったことで、受講者における本テーマの重要性と今後の研究の進展にも興味をもつ機会になっていたと推察される。